



TITLE:

資料10 サル類における病理組織学的研究(肺,眼病変を中心として)(VI 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

野田, 亜矢子; 酒井, 洋樹; 柳井, 徳麿; 柵木, 利昭

CITATION:

野田, 亜矢子 ...[et al]. 資料10 サル類における病理組織学的研究(肺,眼病変を中心として)(VI 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1999, 29: 126-126

ISSUE DATE:

1999-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165203>

RIGHT:

資料9

サル類に寄生するアメーバの病原性に
関する研究

橘 裕司 (東海大・医・感染症)

これまでに我々は、霊長類研究所内の飼育マ
カクについてアメーバ類の感染状況を調査し、
病原性のある *Entamoeba histolytica* は検出され
ず、非病原性の *Entamoeba dispar* による感染が
多いことを明らかにした。それは、わが国でヒ
トから単離されるのがほとんど *E. histolytica* で
あり、*E. dispar* は少ないという結果と対照的で
あった。そこで、サルに寄生する *E. dispar* がヒ
トに寄生するものと同一種であるかどうかにつ
いて検討した。

ニホンザルの糞便から、培養によって *E. dispar*
2株 (PRIKU-44、PRIKU-55) を単離した。虫体
のゲノムDNAからperoxidoxinをコードする遺伝
子をPCRにより増幅し、その塩基配列をヒト由来
の標準株 (SAW1734RclAR) の配列と比較し
た。

732塩基について比較したところ、PRIKU-44
と SAW1734RclAR の間では約1.0%、PRIKU-55
と SAW1734RclAR の間でも約1.0%の配列に違
いが認められた。しかし、これらの違いはすべ
て異なる箇所認められ、PRIKU-44とPRIKU-55
の株間では約1.9%の違いが存在した。この結果
から、サルとヒトに寄生する *E. dispar* は同一種
と考えるのが妥当であると思われた。

資料10

サル類における病理組織学的研究

(肺, 眼病変を中心として)

野田亜矢子, 酒井洋樹, 柳井徳麿, 柵木利昭

(岐阜大・農・獣医・家畜病理)

病死, あるいは実験殺したサル類のホルマ
リン固定標本について, 定法に従いパラフィン
切片を作成後, ヘマトキシリン・エオジン
染色を施して, 光顕下で観察した。

眼球についての観察では, 肉眼的に白内障
を認めた個体において, 水晶体の水腫様の膨
化などの病変を認めた。また, 肉眼的には異
常を認めなかったものでも, 眼周囲筋に炎症
細胞の浸潤を認めた個体を数例認めた。

ニホンザルを中心としたサル類での肺につ
いての観察では, 炎症などの変化を認めない
肺についても, 血管周囲性にマクロファージ
における高度の炭粉の沈着が認められた。こ
れらの変化は大気汚染との関係が考えられ
た。今後の課題として, 炭粉の成分の分析
や, 地域, あるいは種による差異の検討を
行っていきたいと考えている。